

ハイデルベルク信仰問答講解説教34「十戒」(2012年4月29日 礼拝説教)

【聖書箇所】

主はモーセに仰せになった。イスラエルの人々の共同体全体に告げてこう言いなさい。あなたたちは聖なる者となりなさい。あなたたちの神、主であるわたしは聖なる者である。父と母とを敬いなさい。わたしの安息日を守りなさい。わたしはあなたたちの神、主である。偶像を仰いではいならない。神々の偶像を鑄造してはいならない。わたしはあなたたちの神、主である。(レビ19:1-4)

ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたに神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」(マタイ22:34-40)

【説教】

今日から信仰問答は十戒に入ります。今日は問92と93を読みました。問92では、十戒の全文を読んだことになります。これは出エジプト記第20章1節から17節までのところです。教会学校の礼拝で十戒を唱和しますが、その時はこのように十戒の全文を読むことはしません。例えば、第二戒は「あなたはいかなる像も造ってはならない」だけです。その後が続く言葉「上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものも造ってはならない」というそこに続く言葉は読みません。第四戒も「安息日を心に留め、これを聖別せよ」だけで、それに続く「六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない」という部分は読まない。でも本来、十戒はこのハイデルベルク信仰問答が記すように、聖書に記された十戒の全文を指すのです。つまり何が言いたいのかというと、十戒は神さまの言葉であって、単なる法、戒めの羅列ではないということです。

問92の答で「神はこれらすべての言葉を告げられた」とあります。これは出エジプト記第20章1節の言葉です。何でもなくこのように思われるかもしれませんが、ここがとても大事です。十戒、戒めというと、わたしたちは何か冷たい法の条文や規則を考えます。違反したら罰がある。罰がいやだから守る。世の中の条例や規則はそのようなものでしょう。以前、友人がスピード違反で捕まった。1万7千円も罰金を取られたと言っていました。もうこりごりだ。

ともすると十戒、神さまの律法もそのようにわたしたちは受け止めてしまうのです。違反すると罰がある。もうこりごり。だから守る。けれどもこれは単なる規則ではない。罰がいやだから仕方なく守るようなものではない。「神はこれらすべての言葉を告げられた」これは神さまの言葉なのです。10の戒めというより、10の神さまの言葉と理解してもよい。

神さまの言葉はわたしたちを生かすものです。萎縮させるものではない。主イエスは言われます。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(マタイ4:4) 神さまの言葉によって、わたしたちは生きる。それはただ生きていくというよりは、神さまの御前に本来のあるべき人間として生きるということです。あるべきところではないところにいたわたしたちをそこから解放し、自由にする。神さまの御言葉はそのように人間を造り変える。新しくするのは。窮屈に縛り上げ、不自由にするのではない。本来の生き方ができるように造り上げる。そういう神さまの言葉としての十戒なのです。これから十戒を読む上で、そのことを今日はまず押さえておきたいと思えます。

ヨハネによる福音書の初めのところにこうあります。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもの

で、言によらずに成ったものは何一つなかった」(1:1-3) 万物、すべてのものは言、神さまの御言葉によって造られた。それは御言葉によって治められるものとして世界は存在しているということです。人間もそうです。御言葉に治められ、聴き従う存在としてわたしたちは造られました。ところが人間はこの神さまの言葉を捨ててしまいます。あのアダムとエバの失敗、墮罪の出来事、そこから人間の罪の歩みが始まります。神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる者だった人間が神の言葉を捨てたのですから、人間はもう生きられないのです。そこに人間の悲惨があります。

そのことをハイデルベルク信仰問答は最初に明らかにしていました。第2主日を読みましょう。このマタイによる福音書第22章のところは、今日読んだ新約聖書の御言葉です。主イエスが十戒、律法を要約するところだと教えておられる。でも神さまの御言葉を捨てた人間はこれを行うことができない。残念だけれども、人間は神さまの言葉によってしか正しく生きることができない存在なのです。神さまの言葉を捨てた時点で、わたしたちは神さまも隣人も愛することができなくなりました。

けれども、わたしたちはイエス・キリストによって、もう一度、この律法、神の言葉を生きることができるようになれます。ヨハネ福音書はこの後、このように記します。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」(1:14) このイエス・キリストという神さまの言葉が、わたしたちと同じ肉体をとって、この世に生まれ、わたしたちの間に、わたしたちの中に宿ることが起こったのです。イエス・キリストという神さまの言葉によって、わたしたちは御前に生きるものと回復されました。それは言うまでもなくキリストの十字架と復活の御業によって成し遂げられました。第32主日問86の答え「キリストは、その血によってわたしたちをあがなわれた後に、その聖霊によってわたしたちを御自身のかたちへと生まれ変わらせてもくださるからです」とあります。

ここに人間の完全な回心、悔い改めが起こります。十字架のあがないと復活による新しい命。キリストに結ばれて、わたしたちの内にこのキリストが宿ることにより、そこで人間はもう一度、この神さまの命の御言葉によって御前に生きる者と変えられる。律法に生きることができない罪の悲惨を負った人間は、律法に生きる人間、新しい人間と変えられるのです。それはただイエス・キリストの救いが可能にしたのです。これも繰り返して申し上げていることですが、悔い改めというのは、人間が自分の力で生活を改めるといような類いのものではない。根底から新しくなる。再創造です。それは創造主である神さまの御業でしかそのようにされません。問88にあったように、「古い人の死滅と新しい人の復活」キリストの十字架と復活の御業だけがこのことを可能にしました。その救いがわたしたちを律法

に生きる者として造り変えます。

このことは聖書も明らかにすることですが、信仰問答は、第一戒のところに、十戒の序文を含めています。それは「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」という部分です。これも出エジプト記第20章2節の御言葉です。ここは十戒、神さまの律法全体の性格付けをするものですから非常に大事です。十戒は、神さまの救いの条件として与えられたものではありません。これを守ったら救われるというものではないのです。イスラエルはもうエジプトから救われたのです。そういう意味で彼らもまた新しいのです。もうエジプトの奴隷ではない。そこから解き放たれ、新しくされた。新しいイスラエルの歩みが始まった。そのイスラエルに十戒が与えられる。救われた者、古い人ではなく新しくされた者の生活こそが十戒、律法に生きることなのです。逆に言えば、古い人、罪に支配された人間のままで、いくら努力してもこの十戒に示された生活を生きることではできません。神さまの救いがあって、そこから初めてこの十戒を生きる道が開かれるのです。

それゆえに信仰問答は、この十戒を「感謝の生活」として位置づけています。これは救われた者、キリストによって新しくされた者の感謝の生活なのです。罰が怖いから、仕方なくいやいやするものではない。わたしの内によみがえった新しい人がそうさせる。喜んでそうせずにはおれない。それが神の律法なのです。第四戒に「安息日を心に留め、これを聖別せよ」とあります。わたしたちキリスト者にとって安息日はこの日曜日の礼拝です。先日の総会でも「礼拝遵守」ということを言いました。でもこれは強いてすることではない。わたしたちは救われたのですから、礼拝を守って当然なのです。そうせずにはおれないのです。ですから「礼拝遵守」と呼びかけること自体が本来おかしいのかもしれませんが、でもそうしなければならぬのは、まだまだわたしたちの内古い人が死にきれていない。罪の支配にあるということなのです。日々悔い改め、新しくされて、礼拝遵守と言われなくても、進んで礼拝を守ることができるように日々変えられていかなければなりません。

さて、問93では、十戒の区分が言われます。今日は十戒全体を概観するような話になりますが、この区分はこの信仰問答が初めて言っていることではありません。十戒が二枚の石の板に書き付けられたものであることは聖書も伝えています。「主はシナイ山でモーセと語り終えられたとき、二枚の掟の板、すなわち、神の指で記された石の板をモーセにお授けになった」（31：18）なぜ二枚なのか。これは昔から問われていたことですが、伝統的に教会は、十戒がその内容から、一つは神に対する戒めとして、もう一つは隣人に対する戒めとして理解するようにしてきました。そしてその根拠となっているものが、新約聖書のマタイ福音書の主イエスの教えでもあります。マタイ22：37-40を読みましょう。

神さまを愛すること、隣人を愛すること。主イエスが愛するという表現を用いて律法を表していることに注目してください。十戒は「～してはならない」という言葉になりますから、「しないこと」に重点が置かれています。そういう消極的なものとして理解しがちです。しかし主イエスはこれを「愛する」という積極的な意味付けを与えました。これが十戒を解釈する一つの基本となります。

信仰問答でも初めの四つの戒めは「神に対してどのようにふるまうべきか」後半の六つは「自分の隣人に対してどのような義務を負っているか」神さまに対してどのように振る舞い、隣人に対してどのような義務、責任を負うか。そういう積極的な生き方が示されます。十戒はわたしたちが間違いをおかさないように、びくびくさせて生きるように教えるのではなく、どのように振る舞い、どのように義務を果たすのか。そういう日々の歩み、表に現れる生き方を教えています。「感謝の生活」ですから、毎日の具体的な生活が問題なのです。

信仰は、机の上で聖書を読んだから分かるものではありません。

ん。聖書を「信仰と生活とのあやまりなき規範」と信仰告白でも告白しますが、信仰と生活は一つのことです。神さまを信じてと日々の生活は決して分たれるものではありません。口では神さまを信じていると言いつつ、周りの人たちに悲しませ不愉快にさせることは本当に神さまを信じているか問われるでしょう。むしろ日々の生活を通して、そこに信仰は現れてくるものなのであります。

特に信仰問答で「義務を負う」という言葉があります。これは責任を持つということです。隣人に対して責任を持つ。それが本当に隣人を愛することです。「いや、人のことまで責任をもてません」とわたしたちはよく言います。でも本当に愛することは、その相手に対してどれだけ責任を担えるかと思うのです。他人事ではすませない。自分のこととして、その存在を担う。

わたしたちの人生に対して神さまは責任を負ってくださいました。「責任をもてません」と放棄したのではない。キリストを通して、わたしたちの罪の責任を全部負ってくださったのです。そこに本当の愛があります。このキリストの命、新しい命がわたしの内に始まっています。だからわたしたちもそのように生きることができる。

あのおいばぎに襲われた人を助けた良きサマリア人の譬を思い出します。主イエスは最後に問いかけます。「あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」「行って、あなたも同じようにしなさい」わたしたちも同じように生きることができる。家族に対して、友人に対して、本当の隣人として責任を持つこと。その人の救いについて、責任を持つ。律法はそのようにわたしたちを神さまに対して、そして隣人に対して積極的に導くのです。今日からそのようにまた新しく歩み出したいと思います。祈りをささげます。